

分析美学の諸問題

Problems of Analytic Aesthetics

- ① 美学(芸術学)の目的
- ② 芸術の定義
- ③ 作品と解釈
- ④ 美の定義
- ⑤ 美の論理学?
- ⑥ 美と意識
- ⑦ 美的と倫理的
- ⑧ 対象化
- ⑨ 情報美学
- ⑩ ジャンル
- ⑪ 進化美学
- ⑫ メタ芸術
- ⑬ 虚構
- ⑭ 観測選択効果(1)
- ⑮ 観測選択効果(2)

第13章 虚構

芸術の心理的・社会的意義 ≡ 「虚構」の心理的・社会的意義
虚構テキストとは何か 何がテキストを虚構たらしめるのか スタイルか、メッセージか
虚構的对象(キャラクター、都市など)とは何か 虚構の普遍概念はありうるか(虚構の感情、図形など)
虚構世界とは何か 虚構世界と可能世界 虚構世界と平行世界
虚構と嘘 幻想 空想 反実仮想 思考実験 シミュレーション
芸術におけるmake-Believeと、芸術というmake-Believe

虚構の存在論をめぐる諸立場(cf.『虚構世界の存在論』pp.306-7)

- 消去主義 ラッセルの記述理論、クリプキ、カプラン、ドネランの指示の因果説
- 還元主義(テキスト、言語等への) ライルの還元主義、ジョン・ウッズの代入的量化説
- 還元主義(行為への) サールの言語行為論、ウォルトンのメイクビリーブ論
- 具体的存在としての現実主義 パーソンのマイニング主義、(プランティンガの)寓意説
- 抽象的存在としての現実主義 ヴァン・インワゲンの理論的実体説、ウォルター・スτροφの種類説
- 完全個体としての可能主義 スタルネイカーの唯一仮説
- 不完全個体としての可能主義 ハインツの状況説、ハウエルの心眼理論
- 集合体としての可能主義 ルイスの反事実条件法分析

「美」「芸術」のカウンターパート

東洋の美的範疇

cf. 「風雅」……現実と虚構の区別消滅 汎現実主義?

虚構に対する現実的感情？

- ① Xを恐れるには、Xが存在すると信じる必要がある
- ② 我々は虚構的对象を恐れることがある
- ③ 虚構的对象が存在すると我々は信じていない
- ∴ ④ 我々は虚構的对象を恐れ、かつ恐れないということがある

- ①→ 恐怖は非認知的な作用である(進化論的本能である)「存在するかもしれない」で十分である(cf. 未知への恐怖、未来への恐怖) 必要なのは「存在しない」と信じていないことである(最小限の条件)「非存在」が効果を持ちうると信じられるかもしれない(マイノング主義)
- ②→ 我々が恐れるのは「虚構的对象」ではなく、現実には有る代理対象である
我々は虚構的对象を「恐れる」のではなく、虚構的恐れを感じるのみである
虚構的对象を恐れるのは「我々」ではなく、我々の虚構的代理である
- ③→ 虚構的对象は現実には存在している(抽象的对象として)
具体的に存在している(虚構世界の中に)
- ④→ 矛盾した態度は美的態度の特徴である ← さまざまな矛盾律の区別

in f 「虚構において」 F 私は恐れる

$\exists x (in f (Fx))$ x は抽象的对象 または マイノング的对象 または 寓意的代理

$in f (\exists x (Fx))$ x は具体的対象

$\exists x (Fx \wedge (in f (Fx)))$ $\exists x (\sim Fx \wedge (in f (Fx)))$ $\exists x (Fx \wedge \sim (in f (Fx)))$

$\exists x (Fx \wedge (in f \sim (Fx)))$ $\exists x (Fx \wedge \sim (in f \sim (Fx)))$

現実の中の虚構的感情？ (第8章参照)

G……規定された性質

F……恐れの対象である という性質

●虚構的对象を恐れるのは「我々」ではなく、我々の虚構的代理である

◇ $\exists x(Gx \wedge Fx)$ Gなる恐ろしいものがある、という虚構を現実に見賞している

(虚構の中での恐怖の対象)

●我々は虚構的对象を「恐れる」のではなく、虚構的恐れを感じるのみである

$\exists x \diamond (Gx \wedge Fx)$ 虚構の中ではGなる恐ろしいものである、という何かが現実にいる

(虚構の中で恐怖の対象である現実の対象)

$\exists x(Gx \wedge \diamond Fx)$ 現実にGなるものがある、虚構の中ではそれが恐ろしいものである

(現実に虚構的恐怖の対象である対象)

●我々が恐れるのは「虚構的对象」ではなく、現実に有る代理対象である

$\exists x(\diamond Gx \wedge Fx)$ 現実に恐ろしいものがある、虚構の中ではそれがGである

(現実に恐怖の対象である虚構的对象)

cf. * 悲劇のパラドクス

同情は虚構的感情、ハッピーエンド嫌いは現実的感情

* サスペンスのパラドクス

未知へのスリルは虚構的反応、既知のストーリー理解は現実的感情

プラトンの芸術排斥論

cf. 『国家』

- ① 芸術は、非芸術(現実)の影である
 - ② 現実とは、実在(イデア)の影である
 - ③ 芸術は、非芸術(現実)に比べて実在から遠い(①②より)
 - ④ いかなる領域についても実在との近さがその価値を決める
- ∴ ⑤ 芸術は非芸術(現実)よりも価値が低い

①→ 非再現的・非表出的な抽象芸術、オブジェなどは？ オブジェ以外の芸術も、芸術的要素＋非芸術的要素から成るのではないか？

②→ 現実の奥に真の実在というものが本当にあるのか？

③→ 影の影が、影よりも本体に近いということも可能ではないか？ $x > y$ (x は y の影である)の論理が、推移的 $\forall x \forall y \forall z (x > y \wedge y > z \supset x > z)$ でないならば、芸術と実在の距離を現実を介して計ることすらできない

④→ 価値とは影(人為)の産物ではないか？ 影以外のものに価値がありうるのか？

⑤→ 個々の芸術作品の価値が、芸術という文化の価値を決めるのか？ (合成の誤謬: 芸術作品に内在する価値は乏しくとも、芸術作品をめぐる行為や文化現象そのもの(芸術という文化)には、平均して、非芸術的現実を超える価値があるかもしれない)

アリストテレスの芸術肯定論

cf.『詩学』

- ① 詩(芸術)は、現実を普遍性・必然性・可能性・蓋然性の相で捉える模倣(ミメーシス)である
 - ② 歴史は、現実を個別性・偶然性・一回性の相で捉える記述である
 - ③ 対象を個別性の相で捉えるよりも普遍性の相で捉える方が価値高い認識である
- ∴ ④ 詩(芸術)は、歴史よりも価値高い認識をもたらす

①→ 極端に非現実的な描写から成る芸術作品は？ 記述内容としては不可能性を売りにした、言語遊戯としての芸術も多いのでは？

②→ 反実仮想や外挿的推測がないと歴史的認識はできない。つまり歴史には法則的理解(普遍性・必然性の相)が不可欠ではないか？

③→ 形式科学的または自然科学的な認識でない限り、個別性で捉える方が現実の正しい理解に接近できるのでは？

④→ ①で言う「模倣」が「認識」の一種であるという前提を付け加えないと、①②③から④は導けない。模倣は認識の一形態なのか？ 模倣は行為であり、認識を一条件とするだけで、認識とは言えないのでは？ 現実の模倣は、模倣対象からの認識を必要とせず、他の芸術作品からの認識だけでも十分ではないか？

(前頁⑤への反論と同趣旨) 個々の芸術作品の価値が、芸術という文化の価値を決めるか？ (合成の誤謬: 個々の芸術作品に内在する価値が平均して個々の歴史的記録の価値より高いと認められたとしても、芸術作品をめぐる行為や文化現象そのもの(芸術という文化)が、歴史的記録をめぐる行為や文化現象(歴史という文化)に勝るかどうかは議論の余地がある)

文献

西村清和『フィクションの美学』勁草書房

三浦俊彦『虚構世界の存在論』勁草書房

清塚邦彦『フィクションの哲学』勁草書房

デイヴィッド・ルイス『反事実的条件法』勁草書房

グレアム・プリースト『存在しないものに向かって——志向性の論理と形而上学』
勁草書房

Kendall L. Walton *Mimesis as Make-Believe* (Harvard U. P. 1990)